

114 江戸時代の車（2022 年 6 月 2 日）

パリから北東約 80 キロにあるコンピエーニュには、歴代のフランス王や皇帝ナポレオンが愛したコンピエーニュ城があります。コンピエーニュ城には、フランス国内でも珍しい自動車博物館があります。馬車、自転車や自動車など、陸上輸送の歴史がわかる博物館です。昨年、パリで開催されたある展覧会で、この博物館が所蔵する日本の駕籠（かご）が展示されていました。



駕籠とは、竹又は木製の座席を一本の棒に吊るし、座席の前後で人が棒を担いで運ぶ乗り物です。中世の時代から使われ、庶民にも広がった江戸時代に最も多く使われていました。江戸時代の旅は徒歩が原則でしたが、中には駕籠を利用した人もいました。いわば江戸時代のタクシーとも言えます。溪斎英泉による木曾街道六十九次にも、駕籠を持つ人を描いた浮世絵があります。



駕籠には、乗車する人物の身分や階級、用途によって、様々な種類がありました。その中でも、引き戸付きで装飾が施されているものを、特に「乗物（のりもの）」と言います。将軍や大名の正室だけが使用した女性用の乗物には、蒔絵や金工など豪華な模様が施され、8名から10名程度の人で担ぎました。大名家の婚礼の際に制作されるものであることから、駕籠の各所には家紋（<https://www.fr.emb-japan.go.jp/files/100547195.pdf>）が散らされています。写真の乗物は、家紋から東北地方を支配した伊達氏のものであったことがわかります。自動車博物館のウェブサイトによると、徳川家の乗物も所蔵しています。（<https://chateaudecompiegne.fr/collection/objet/palanquin-japonais-ou-norimo>）このような豪華な装飾が施された乗物は、日本でもあまり見かけません。これらの乗物は、残念ながら常設展示はされていませんが、貴重な駕籠がフランスで保存されていることに驚かされます。

パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

コンピエーニュには、他にも日本との接点があります。1988 年に福島県白河市と姉妹都市提携を結び、交流が行われてきました。両市の温かい交流が長く続くことを願っています。

